

## 景観改善の「物語」とその「伝染」について

Narratives on improvement of landscapes and its Infection

Technology of design should be utilized by residents in an urban area for the actual improvement of urban landscapes, though the technology looks excellent. With this recognition, the conditions that design technology could be sufficiently and efficiently utilized by urban residents were discussed in this paper. The discussed conditions include existence of residents' will to improve the landscape, narratives making of the process of improvement of urban landscapes due to residents efforts, and infections of will to improve the landscapes by means of the narratives.

藤井 聡

東京工業大学大学院理工学研究科・教授

Professor, Department of Civil and Environmental Engineering, Tokyo Institute of Technology

### 「まちの意志」がもたらす「景観改善」

「都市景観」は、一面においてデザイン技術の問題であるが、そうした側面でのみ都市景観を捉える視点は、極めて表層的なものの見方にしか過ぎない。

いかに素晴らしいデザイン技術がこの世に存在していようとも、そうした技術を活用しようとするヒトや組織が無ければ、その技術が現実の世でかたちとなることは無い。さらには、そうした技術を活用したくても、諸種の社会的、政治的要因故に、活用することが現実的に困難な状況であるならば、同じく、その技術がかたちを得ることはない。

その一方で、ある「まち」のヒトや組織が、実質的に自らのまちの景観を改善するデザイン技術を一切所持していなかったとしても、都市景観にも繋がり得る、そのまちそのものを改善しようとする十分な意志と、その意志を貫徹せしめる十分な政治的、社会的戦略性を所持しているのなら、都市景観は確実に改善されていくことは間違いない。なぜなら、彼ら自身がデザイン技術を携えていなくとも、どこかからデザイン技術を携えた技術者を呼んできて仕事をさせることもできるだろうし、相応しい技術者がどこに居るのかの知識が不在であっても、あれこれと尋ね歩くことで、適切な技術者に巡り会うこともあろう。そしてよしんば非常に優れたデザイン技術者に出会えなかったとしても、彼らは自らの街路景観を抜本的に“改善”していくことができるであろう。なぜなら、街路景観とは、あらゆる要素から構成されているのであり、その多くが、そこに住まい、働き、憩う人々の手で左右されるものだからである。彼らは、景観改善などに頓着しないまちの住人とは異なり、ゴミを捨てないだろうし、こまめに掃除をすることだろう。品位無き看板やのぼりを出すことは無いだろう。適切な場所があれば、花を植えることもあるだろうし、植樹の

手入れも怠らないだろう。収入の幾ばくかを割いて、街路景観全体への調和を意識しつつ、壁や塀に色を塗ることもできるかもしれないし、もっとお金があれば、壁や塀の素材を変えていくこともできるだろう。

無論、色を変えたり、素材を変えたりするようなそうした取り組みは、素人にはできないものであることを、彼らは知っているに違いない。だからこそ、彼らは、そうした技術を持つ人々を探すことだろう。そして、そうした技術者に巡り会ったとしても、彼らはその技術者の提案を鵜呑みにするようなことは決して無いだろう。なぜなら、彼らはそのまちを愛し、そのまちの景観を改善したいと願う人々なのであるから、どこの馬の骨とも分からぬような、場合によっては金儲けのためだけにここに来ているかも知れないような輩の言うことを鵜呑みにすることなどあり得ないのである。そして、彼らは、外様のそうした技術者をなかなか信用しないかもしれないが、もしもその技術者が良い仕事をしたのなら、彼らは、その技術者を信用していくこととなるだろう。そして、徐々にその技術者とまちの人々との間の信頼関係は築き上げられていくことであろう。そうなれば、まちの人々とその技術者との間に意見の対立が生じたとしても、「この方がおっしゃるのだから、そうした方がいいのかも知れない」という方向で合意が得られることもあるだろう。

かくして、素晴らしいデザインの技術がもし不在であったとしても、まちをよくしようと考える意志さえそのまちにあるのなら、まちの景観は、大きく改善しうるのである（藤井, 2007）。すなわち、都市景観の改善の議論において何よりも重要なのは、それぞれのまちそのものの意志の強さなのであり、その意志をもたらず根源としての“まちの活力”そのものなのである。

### 良質な「風景」と「デザイン技術」の生成

そして、そうした景観改善の営為を、そのまちが何十年、何百年、そして千年を越える長きにわたって繰り返すことができるのなら、その地に訪れた異郷の人間が生涯忘れ得ぬ程の感嘆を覚えるほどの、「素晴らしい」という言葉で表現することが<sup>はばか</sup>られるような素晴らしい風景とたたずまいが現出することとなるだろう。これこそ、全ての都市景観に関わる人々が最も敬意を表すべき景観なのであり、風景である。それ以上に素晴らしい「デザイン」など、この世に存在するはずもない。なぜなら、その風景は、その地に住まう人々の何十年、何百年以上にも及ぶ営みがあつてはじめて構成されたものなのであり、誰かが頭の中で思い付きのように考え出したアイディアでもって“デザイン”したものなのでは決してあり得ないからである。

むしろ、そうした人々の営みの中から、真に良質な「デザイン技術」なるものが立ち現れてくるに違いない。先に述べたような、まちの人々からの信頼を集めた技術者が、そのまちの改善のために日夜努力することを通じて徐々に形作られていくのが、デザイン技術と呼ばれるものなのである。すなわち、「デザイン技術が風景を生み出す」のではなく、

よきまちを目指す種々の営為の中から生み出されるものが「デザイン技術」なのである。

### 「デザイン技術」の重大な役割

ただし、全てのまちが、そうした長い歴史と伝統を持っているとは限らないのも事実である。むしろ、デザイン技術を生み出す程の歴史と伝統を持っているまちは、この現代社会の中では極めて限定的なのだと一言を言わざるを得ない。まちの改善を目指す人々が急に立ち現れ、自らのまちの改善を目指す運動を、今、まさに始めた、というまちはこれまでも数多くあっただろうし、これからも数多く現れることであろう。

繰り返しとなるが、こうした時に必要なのはやはり、そのまちの景観を、ひいては、そのまちそのものを改善していこうとする「まちの意志の強さ」であることは論を俟たない。彼らはまず、自らの手が届く範囲でできることを、一つ一つ行い、積み重ねていく以外になすべきことは無い。しかし、そうした、自律的な活動、いわば、「景観まちづくり」とも呼ばれる活動を続けるにあたって、他のまちや地域の伝統的歴史的な景観改善活動の中で生み出された「デザイン技術」を「活用」することができることは、極めて重大な意味を持っている。そうした他の土地でつくられたデザイン技術を活用することによって、そのまちは、回り道をせずとも効果的、効率的に景観を改善していくことが可能となるからである。

そして重要な点は、先にも指摘したように、健全なるかたちで景観改善を進めようとしているまちの人々は、そうした「外様のデザイン技術」を決して容易には信用しない、という点である。自らのまちのことをよくよく考え、そのまちにとって如何なるデザインが必要なのかを考え続けている人々にとって、単なるコンセプトは、机上の空論にしか見えぬものであるに違いない。しかし、そのデザイン技術が、真にそのまちの景観改善に資するものであるのなら、彼らは必ずや、その技術の重要性に思いが至り、さながらスポンジが水を吸収していくように、そのデザイン技術をそのまちに取り入れていくこととなる。

### 「デザイン技術」の運用上の課題

デザイン技術の運用を考える上で、ここが一番難しいところであろう。このように、あくまでも「まち」が主体であり、特定のデザイン技術を当該の「まち」が「活用」という関係が、理想とするまちづくりとデザイン技術との関係であるに違いない。しかし、必ずしもそうした理想通りには事が進まないのである。

第一の失敗は、「まち」側にある。まず、その「まち」に景観を改善しようとする意志が不在であれば、論外である。どんなに素晴らしいデザイン技術を紹介しても、それはいわゆる「ネコに小判」とならざるを得ない。この点は、今まで繰り返し論じた通りである。しかし、より深刻な問題は、「まちを改善しようとする意志は幾ばくか存在しているが、ま

ちの改善を、それほど強くは念じていない」というようなケースである。こういうケースは、様々な要因で生じうる。行政の中で景観改善を進めてきた熱心な担当者がいたが、それを引き継いだ後任が、景観改善についてはさしてやる気が無いが、仕事を引き継いだので何かやらないといけない、というような場合に生じうる。あるいは、景観改善をからめれば補助金がでるので応募しようか、というような商店街の場合にも、こういうケースは生じうる。こうしたケースにおいては、本来主体であるはずの「まち」側はさして強い「意志」を持たず、確たる主体性が存在していない。こういう場合、当該のデザイン技術が、当該のまちに相応しいか相応しくないかの判断が十二分になされないままに、当該のまちに適用されてしまう、というような残念なケースがしばしば起こりうるであろう。無論、技術者側は、そうならないように、入念に当該地域の状況を勘案し、可能な限り当該の地域に相応しい形で当該のデザイン技術を適用しようとするものもあるのだろうが、その地に住み、その地のことを熟知しているとは必ずしも言えない技術者に、その地に最も相応しい形でデザイン技術を適用できるとは必ずしも限らない。

第二の失敗は、「技術者側」の問題である。上述のように、技術の適用・転用において何よりもまず重要なことは、「当該技術を活用する“まち”側に主体性があることを理想とする」と考えることである。この感覚が不在のデザイン技術者は、その地の歴史や伝統、風土を一切顧みず、のべつまくなく、自らの好むデザイン技術を適用したがることとなろう。言うまでもなく、こうしたデザイン技術の適用行為は、当該の技術者の主観的な満足感を（そして言うまでもなく、多くの場合、経済的な収益を）向上せしめるであろうが、それが当該のまちの景観にとって必ずしもプラスとなるとは限らない。場合によっては、そうしたデザイン行為が、当該の景観、風景、風土に、「破壊的」な影響を及ぼすことともなるう。

かくして、都市景観の実質的な改善にとって、「デザイン技術」は諸刃の剣なのである。上手に使いこなすことができるのなら、極めて効率的、効果的に、当該の景観を改善せしめることが可能となる一方で、技術者とまちの人々との間の関係が必ずしも適切なものでなければ、景観改善を期することができなくなるばかりか、場合によっては、“景観劣化”を導きうるものでもあるのである。

### 「デザイン技術」の適切な運用に向けて

言うまでも無いが、こうした「技術」と「まち」との関係は景観に限らず、あらゆる局面において生ずるものである。例えば、「交通まちづくり」と呼ばれるまちづくり活動では、交通に関わる各種の「技術」、例えば、バス運用技術、LRT運用技術、財源獲得に関する技術、そして、モビリティ・マネジメントと呼ばれるコミュニケーション施策に関する諸技術が存在しているものの、それらの技術を「上手に使いこなす」ことができなければ、その「まち」が「改善」されることはない。

さらにより普遍的に言うならば、「技術」と「人」の間には、こうした緊張関係が常に存在している。そもそも技術とは、人や社会の有り様のごく一部を、効率的に、特定の方向に改善せしめるものにしか過ぎないものである。しかし、そうしたごく一部を効率的に改善したからといって、人や社会そのものが改善する事などあり得ない。人や社会という存在は、様々な要素が有機的に絡み合いつつ動的に変化する高度に複雑な現象を謂うのであり、そうした複雑な現象の全体が、たかだかいくつかの要素を変化させたところで、改善されるということなど原理的にあり得ない。だからこそ、技術を活用する者は、それが如何なる技術であったとしても、その技術を適用する人や社会の“全体像”を見据えつつ、あくまでもその“全体”を改善するために、その技術を“活用”するのだ、という形で、「技術を上手に使いこなす」ことが不可欠なのである。

しかし、繰り返しとなるが、そうした「技術の活用」がなされて行くとは限らない。その問題について、どの様に対処していくべきか——。この点については、心ある技術者・デザイナー、そして、まちの景観を様々な形で担っている多様な人々が、あらゆる場面を通じて様々なコミュニケーションに多面的に参加していく以外にはあり得ないのだろうと思う。

### 景観改善の「物語」と「伝染」

例えば、あるまちに、自らのまちの景観の改善に向けた多面的な努力を行い、素晴らしい成果を上げた人々がいたとしよう。もしも、こうした人々の取り組みが一切他のまちに伝わっていなかったとしたら、彼らの取り組みは、彼らのまちの改善をもたらすだけで終わることとなる。しかし、そうした人々の取り組みが、他のまちの人々に伝わったとしたら、その時、一体何が起こるだろうか。

無論、自らのまちの景観の改善に全く関心の無い人々の耳に、その話しが伝わったとしても、何も起きはしない。しかし、多くの人々がそうであるように、自らのまちに幾ばくかの関心を持つ人々の心にその話が伝われば、その人達の心が「動く」ことはあり得るだろう。

ただし、その話が、単なる味気ない情報・インフォメーションであったなら、よほど景観に興味関心を抱く人々を除いて、心が動かされるようなことはない。多くの人々の心が動かされるのは、その話が「物語」として語られている時のみに限られる。言い換えるなら、あるまちの景観改善の経緯が、単なる味気ない年表で紹介されるのではなく、「物語性」を帯びた形で語られる時、多くの人々の心が「動く」のである。

こうして心を動かされた人々の中には、ただ単にその場面で心が動き、ある種の束の間の「感動」を覚えただけで、再び、自らの日常に埋没していく人々がいることは間違いない。しかし、全員が全員、その「感動」を瞬間に消費してしまい、その「感動」の前後で何ら差異が生じていない、という様な、ニヒリスティックな者なのでは決してない。少な

からずの人々が、その「感動」を契機として、実際に、何かを始めることが起こりうるのである。例えば、あるまちの景観改善の成功の物語に触れた人の内の幾人かは、その物語で語られているような成功物語を、わがまちで実現するためには何ができるのだろうかと考え始める。そうした人々の一部は、景観デザインの勉強を始めるかもしれないし、そういう技術者を探し求めるかもしれないし、そのために必要な財源を集める努力をするかもしれない。あるいはそれらが全て難しくとも、少なくとも自らの感動を他者に語り、共感を得ることができそうな仲間を増やし、語らいを始めることもあるかもしれない。そして、彼らは彼らなりの「物語」を紡ぎ始めるのである。もちろん、その物語が、そのまちでどのような結末を迎えるのかは、それが始まった時点では誰にも分からない。しかし、もし彼らのまちに強い「意志」があるのなら、その物語は必ずや、何らかの具体的な「改善」を、そのまちにもたらさずにはおかないだろう。より正確に言うならば、そのまちに強い「意志」が存在しているのなら、目に見える具体的な「改善」が見られぬうちに、物語を紡ぐ力が「萎えて」しまうようなこと等あり得ないのである。

かくして、あるまちの物語は、他のまちに「伝染」し、そして、他のまちの物語へと繋がっていくのである。そして、その物語に触れれば、さして目的意識も強い意志もなく、日々の日常に埋没している人々の心の内に“意志の力”が蘇ることが起こり得ることもあるのである。さらに言うならば、あるまちの活力ある「物語」は、他のまちの「活力」を蘇らせる力を秘めているのである。

この物語の伝染プロセス、さらに言うなら、物語を通じた、良きまちを志向する意志と活力の伝染プロセスこそが、「コミュニケーション」と呼ばれるものの本質に他ならない。こうした良質の伝染プロセスとしてのコミュニケーションがあつてはじめて、無機質な「デザイン技術」を「活用」し、「使いこなす」ことができるような活力あるまちが、一つまた一つと増えていくこととなるのである。そしてそれを通じて具体的な景観の改善が様々なまちで進められることとなるのである。

そうである以上、さまざまなまちの景観改善において何よりもまず大事であるのは、それぞれのまちの物語を、それぞれのまちに関わる人々が、一つ一つ紡ぎあげていこうとする営み以外に何も無いのである。そして、そうした営みをもたらす重要な契機こそ、他のまちの「物語」に触れるという機会なのである。

だからこそ、さまざまなまちの景観改善をもたらそうと考える都市計画者、土木計画者、行政関係者は、それぞれのまちの景観改善の取り組みを、単なる「事例」として無機質に情報を取りまとめるのではなく、血肉の通った「物語」として語らねばならないのである。そして、その物語に、いろいろなまちの人々が触れる機会を、例えば雑誌やテレビなどの媒体、あるいは、研究発表会や受賞発表などの形で様々な形で設けていくことが必要なのである。「まちづくり」にかかわる研究者は、今一度、まちづくりの「物語」とそこに宿る「意志の力」、さらには、それに触れることによってもたらされる「感動」による「伝染」を契機とした、他のまちにおけるまちづくりの自律的展開、といった伝染プロセス／コミュニケーション・プロセス<sup>[1]</sup>の存在を、明示的に理解することが不可欠なのである。そして、

そのプロセスを如何にして活力ある形で促進していくことができるのかについての智恵を絞り、その促進に向けた各種の取り組みを続けていくことが必要とされているのである。

#### 脚注

[1] 以上のコミュニケーション過程は、現代科学風に言えばミームの伝染過程、あるいは、進化心理学上の概念を用いて言うならば、集団淘汰圧による集団遺伝子の進化ということもできる（羽鳥・藤井，2008）。ただし、そうした無味乾燥な科学的概念では、本稿で論じた「物語」「物語性」を十二分に表現することは著しく困難である。やはりそこには、「物語」「感動」「伝染」「意志の力」といった、通常の科学では語り得ない、「思想的概念」がどうしても必要とされているのである。これを現代思想の視点で言うなら、本稿で論じているコミュニケーション過程は、例えばニーチェが論じたようないわゆる思想の伝染過程そのものなのである。

なお、物語と伝染から構成されるコミュニケーション・プロセスを明示的に意識した具体的な政策展開として、交通計画の分野で進められている「モビリティ・マネジメント」（c.f. 藤井，谷口，2008）と呼ばれる一連の取り組みが挙げられる。特に、全国の自治体でのモビリティ・マネジメントの浸透と促進を意識した全国大会（日本モビリティ・マネジメント会議，略称JCOMM）が年に一回開催されているが、これは、本稿で論じた、まちとまちの間の「物語」を媒介とした「意志の力の伝染」を明示的に意図して設置された定例会議である。

#### 参考文献

- 藤井 聡：風格ある風景と「行動変容」，In. 土木と景観—風景のためのデザインとマネジメント—，学芸出版社，pp. 11-54, 2007.
- 藤井 聡・谷口綾子（共著）モビリティ・マネジメント入門：～「人と社会」を中心に据えた新しい交通戦略～，学芸出版社，2008.
- 羽鳥剛史・藤井聡：地域コミュニティ保守行動に関する進化論的検討：階層淘汰論に基づく利他的行動の創発に関する理論的分析，社会心理学研究，（印刷中），2008.